

## 『宋詩精華録』に収録された徐璣と徐照の作品

三野豊浩

### 〔要旨〕

本稿では、南宋の後半期に活動した「永嘉の四霊」のうち、比較的介绍される機会の乏しい徐璣と徐照の作品を重点的に紹介する。具体的には、陳衍の『宋詩精華録』に収録されている二人の作品を順に紹介し、詳しく解説する。まず徐璣の作品として五言律詩「泊舟呈靈暉」、七言律詩「贈徐照」および「句」(五言律詩「黃碧」の頷聯)を紹介し、次に徐照の作品として五言絶句「莫愁曲」、七言絶句「柳葉詞」および七言古詩「分題得漁村晚照」を紹介する。また必要に応じて、関連するその他の作品にも言及する。なお、徐照の「莫愁曲」と「柳葉詞」はすでに他の論文で紹介してあるので、ここではごく簡単な紹介にとどめる。

〔キーワード〕 宋詩、永嘉の四霊、徐璣、徐照、翁卷、趙師秀、陳衍、『宋詩精華録』、『宋詩鈔』、『宋詩紀事』

### はじめに

徐璣(一一六二～一二二四)、字は文淵、または致中。号は靈淵。本籍地は晋江(福建省)だが、永嘉(浙江省温州)で生まれた<sup>(1)</sup>。南宋(一二七〇～一二七九)の後半期に活動し、「江湖派」と総称される民間の詩人たちの先駆的存在となつた「永嘉の四霊(徐照、徐璣、翁卷、趙師秀)」の一人に数えられる。建安(福建省)主簿、永州(湖南省)司理、龍溪(福建省)丞、武当(湖北省)令などの小官となり、各地を転々とした。最後は長泰(福建省)令に任命されたが、寧宗の嘉定七年、赴任する前に五十三歳で世を去つた。同郷の学者で四霊の指導的立

場にあった葉適（一一一〇～一二二三）が、「徐文淵墓誌銘」を書いてある。詩集として『二薇亭集』があり、清・呉之振他に よる『宋詩鈔』の『二薇亭詩鈔』は、その作品七十九首を収録している。「二薇」とはおそらく、殷周革命の際に首陽山にもり、薇を採って食べながら過ごし、ついには餓死したと伝えられる伯夷・叔斉の故事にちなんだ命名であろう。『全宋詩』は、卷二七七七～卷二七七八（第五十三冊）に徐璣の詩一七〇首と句一つを収録している。

徐照（？～一二二二）、字は道暉、または靈暉。号は山民。永嘉（浙江省温州）の人。「永嘉の四靈」の一人で、徐璣と共に「二徐」と称される。徐璣とは対照的に生涯仕官せず、各地を吟遊し、後に帰郷した。寧宗の嘉定四年、徐璣の没する三年前に世を去り、葉適が「徐道暉墓誌銘」を書いてある。詩集として『芳蘭軒集』があり、『宋詩鈔』の『芳蘭軒詩鈔』は、その作品八十八首を収録している。徐照は四靈のうち最も多作な詩人で、『全宋詩』は、卷二六七〇～卷二六七二（第五十冊）にその詩二六一首を収録している。

徐璣と徐照は知る人ぞ知る詩人であり、中国ではまだしも、日本では彼らの作品が紹介される機会はきわめて乏しい。四靈のうち翁卷（生卒年未詳）と趙師秀（一一七〇～一二二九）の二人は、『千家詩』にその作品が収録されていることもあって比較的介绍される機会にめぐまれていたが、徐璣と徐照の二人は、小さな選集では省略される場合が多い。松枝茂夫編『中国

名詩選（下）』（一九八六年十月、岩波書店）が、四靈の作品としては翁卷の七言絶句「鄉村四月」と趙師秀の七言絶句「数日」のみを収録しているのは、その一例である。前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』（一九七七年九月、東京堂出版）および山本和義他『鑑賞中国の古典22宋代詩詞』（一九八八年二月、角川書店）が、四靈の作品をそれぞれ一首ずつ公平に収録しているのは、むしろ例外的であろう。しかし徐璣と徐照には佳作も多く、それらが紹介されないままになっているのは残念なことである。そこで本稿では、清末から民国にかけて活動した陳衍（一八五六～一九三七）の『宋詩精華録』に収録された作品を中心として、徐璣と徐照の素描を試みたい。

ここで、『宋詩精華録』という書物について簡単に説明しておこう。同書は、宋詩の発展を唐詩になぞらえて北宋（北宋前期）、盛宋（北宋後期）、中宋（南宋前期）、晚宋（南宋後期）の四つの時期に大まかに区分し、宋代の代表的な詩人二九人の作品を収録したものである。同書では、四靈の詩はすべて巻四の晩宋の部分に収録されている。比較的近年に出版された『宋詩精華録』のテキストとしては、次の三種類がある。

- 一、曹中孚校注『宋詩精華録』（一九九二年三月、巴蜀書社）
- 二、蔡義江、李夢生撰『宋詩精華録注』（一九九九年十二月、上海古籍出版社）
- 三、沙靈娜、陳振寰注釈『宋詩精華録全訳』上下冊（二〇〇〇）

年六月、貴州人民出版社中国歴代名著全訳叢書)

これらのうち一は繁体字の縦書きで、しかも陳衍の評点(評語と傍点)が記載されている。二と三は簡体字の横書きで、より新しいものであるが、収録されたすべての詩に現代中国語訳が施されており、大変参考になる。本稿では、詩の表記は一を基準とし、読解にあたっては二と三をあわせて参照した。ただし表記は、原詩・訓読ともに新字体、新仮名遣いとした。

### 『宋詩精華録』に収録された徐璣の作品

まず、徐璣の作品を紹介する。『宋詩精華録』に収録された徐璣の作品は、五言律詩一首、七言律詩一首、および五言律詩の対句一聯である。冒頭に陳衍による簡単な作者紹介があるので、その全文を次に示す。陳衍は二ヶ所に傍点を施している。

徐璣、字文淵。從晉江遷永嘉、官武當長泰令。璣自謂能復唐詩、復賈島姚合之詩耳。詩多酸寒、寒不厭、酸則可厭。録其不酸者。

徐璣は、字を文淵という。晋江から永嘉に移り、役人としては武當と長泰の令となった。徐璣は唐詩を復活させることができると思っていたが、ただ賈島と姚合の詩を復

活させただけである。その詩は世事に迂遠で貧寒なものが多く、貧寒なのは嫌われないが、迂遠なのは嫌うべきである。その迂遠でないものを収録する。

「璣自謂能復唐詩、復賈島姚合之詩耳」について。各種の概説が指摘するように、永嘉の四靈は、宋詩、特に北宋・黃庭堅(一〇四五〜一一〇五)を開祖とする「江西詩派(江西派)」の主知主義的な作風に反対し、同派が尊崇する杜甫を否定し、かわりに晩唐の賈島・姚合を規範として、「唐詩を復活すること」を創作の目標に掲げた。彼らは苦吟と推敲に徹し、極力典故を用いない「白描」の手法で詩を作った。これは徐璣のみならず、四靈に共通の方法論である。しかし、彼らのいう「唐詩」はあくまでも狭義の「唐詩」であり、ついにその神髓に至り得なかつたことは、やはり各種の概説が指摘する通りである。

「詩多酸寒、寒不厭、酸則可厭。録其不酸者」について。この文の意味を正しく理解するには、「寒」と「酸」の概念の違いを正しく把握する必要がある。まず「寒」である。『新華字典』(一九九〇年、商務印書館)によれば、「寒」の②として「窮困(困窮するさま)」とあり、用例として「家里很貧寒(家がとても貧しい)」とある。北宋・蘇軾(一〇三七〜一一〇二)の「祭柳子玉文(柳子玉を祭る文)」に「郊寒島瘦(孟郊は貧寒、賈島は枯瘦)」という有名な言葉があるが、この場合の「寒」も同様のニュアンスであろう。では「酸」はどうか。やはり『新

『華字典』によれば、「酸」の⑤として、「旧時譏諷人的迂腐（古い時代に、人が世の中になうといことをそしる言葉）」とあり、用例として「酸秀才（世事になうといインテリ）」とある。「二薇亭」と称するだけあつて、徐璣という詩人は官吏の身でありながら隱逸志向が強く、決して世渡りのうまい人物ではなかつたのであろう。以上をふまえ、いよいよ徐璣の詩の紹介に入ることにしたい。

一、「泊舟呈靈暉」（五言律詩）

まず最初に、徐璣の五言律詩「泊舟呈靈暉」を紹介しよう。この詩は『宋詩精華録』の他、『宋詩鈔』の『二薇亭詩鈔』にも収録されている。

泊舟呈靈暉 舟を泊し靈暉に呈す

●○○●●●  
泊舟風又起 舟を泊すれば 風 又た起き

●●●○○●  
繫纜野桐林 纜を野桐の林に繫ぐ

●●●○○●  
月在楚天碧 月在りて 楚天 碧く

○○○○●●  
春来湘水深 春 来たりて 湘水 深し

○○○○●●  
官貧思近闕 官は貧しくして 闕に近からんことを思うも

●●●○○●  
地遠動愁心 地は遠くして 愁心を動かす

●●●○○●  
所喜同舟者 喜む所の舟を同じゆうする者

○○○○●●  
清羸又好吟 清羸にして又た吟を好む

〔韻字〕林、深、心、吟（下平声十二・侵韻）

《船を停泊させて徐靈暉に呈示する》

船を岸边に停泊させれば風がまたしても吹き起こり、ともづなを林の中の野生の桐の木につなぎとめました。

月が出て楚の地の空は濃紺色に染まり、春が来て湘水は深々と水をたたえています。

私の官位は低く俸給は少なく、勤務地が都の近くになることを望んでいます。実際の任地は都から遠く離れていて、愁いが心にわき起こります。

それにしても、私が好ましく思う同じ船のお方は、上品に瘦せていて、私同様に詩の吟詠を好まれることですね。

この詩はその内容から、徐璣が永州に司理（犯罪、刑罰をつ

かさどる役人」として赴任する船旅の道中の作と考えられる。徐璣が永州に滞在した時期は正確にはわからないが、その赴任の船旅に徐照が同行していたことは、この詩の内容から明らかである。また、徐璣が永州に赴任する際に翁卷が書いた送別の五言律詩「送徐靈囀永州司理〔徐靈囀永州司理を送る〕」の領聯は次のようにうたっており、徐璣の永州での任期が三年であったことがわかる。<sup>(6)</sup>「靈囀」は「靈淵」に同じく、徐璣の号。「囀」は「淵」の古字である。

地 遙行幾郡 地 遙かにして 幾郡をかく行く  
官 小度三年 官 小さきも 三年に度る

また趙師秀は、徐璣に対して送別の五言律詩「送徐璣赴永州掾〔徐璣の永州の掾に赴くを送る〕」を、徐照に対して送別の五言律詩「送徐道暉遊湘水〔徐道暉の湘水に遊ぶを送る〕」を、それぞれ書いている。「掾」は、属官、下級官吏。したがって「永州掾」は「永州司理」にほぼ同じ。また「徐道暉」は、徐照のこと。「湘水」は、楚の地を流れる川で、同地の象徴。徐璣の旅は役人としての赴任の旅であるから、趙師秀は「赴」と表現している。これに対し徐照の旅は目的のない放浪の旅であるから、趙師秀は「遊」と表現し、区別している。いずれにせよこれらの送別詩は、徐璣と徐照が共に永州に旅立ったことを裏づけるものであり、またそのことが翁卷と趙師秀にとつても周知

の事実であったことを物語る。徐璣と徐照が連れ立って旅に出た経緯は、不明である。永州への赴任が決まった徐璣が、一人だけで遠方へ旅立つ心細さから徐照を誘ったものか。それとも、徐璣の赴任を知った徐照が、みずから同行を願ったものか。ともあれ、以下に徐璣の詩を詳しく解説することしよう。まず、詩題について。「泊舟」は、乗っている小舟を川岸に停泊させる。「呈」は、呈示。さし出して見せる。遠方にいる相手に詩を贈る場合は「寄」を用いるのが普通であるから、「呈」が用いられていること自体、相手は作者のごく身近にいることを物語るであろう。「靈暉」は、徐照の字。

首聯。第一句は特に説明を要さないが、「風」は人生の逆境を象徴するのもかも知れない。第二句、「繫纜」は、小舟のともづなをつなぐ。舟を岸辺に固定して、陸地にあがることを表す。「野桐林」は、野生の桐の木の本。その中の一本、岸辺に近い所に生えている木に、ともづなを結び付けたのである。

領聯。対句から成る。第三句、「楚天」は、楚の地の空。「楚」は、戦国時代の国名で、今の湖南、湖北両省の一带。屈原の『楚辞』によって知られる。「碧」は、濃紺。月の光を浴びて、空が漆黒の闇ではなく、かすかに青みがかっていることを意味する。陳衍はこの句に圈点を施し特筆しているが、確かに印象的な叙景の句である。第四句、「湘水」については、前述。『楚辞』の「九歌」には、湘水の男神である「湘君」と「湘夫人」が登場する。以上の二句は、一見恬淡とした情景描写に旅愁を



にじませている。

頸聯。やはり対句から成る。第五句、「官貧」は、自分の官位が低く、俸給が乏しいこと。「闕」は、都にある宮殿の門。転じて、都そのものを指す。南宋の時代になっても、建前上の都はあくまでも開封（河南省）であったが、実質上の都は、行在所である臨安（浙江省杭州）であった。「思近闕」とは、なるべく臨安の近くで勤務したい、という下級官吏のささやかな願いを表す。第六句、「地遠」は、実際には任地が都から遠いこと。「動愁心」は、愁いの気持ちが心にわき起こること。参考までに、趙師秀の「送徐璣赴永州掾」（徐璣の永州の掾に赴くを送る）は次のようにうたい、徐璣を慰め励ましている。

家貧難挾宦 家 貧しければ 宦を挾び難きも  
身遠易成名 身 遠ければ 名を成し易からん

「身遠易成名」とは、古来遠方に追放された詩人で名を成した者が少なくないことをふまえての言葉である。ちなみに、徐璣が赴任した永州（湖南省）は、かつて唐の柳宗元（七七三—八一九）が流された土地でもある。

尾聯。第七句、「所喜」は、自分が好む所の。「同舟者」は、同じ船で旅をしている者。言うまでもなく徐照をさす。第八句、「清羸」は「清瘦」に同じ。平仄の都合で、仄字の「瘦」を平字の「羸」に置き換えたのであろうか。意味はどちらも「やせ

る」だが、単に肉体的に痩せている、というのみならず、清貧に徹し風雅を好む、といった精神的な意味あいも付与されている。この結びは、僻遠の地へのあまり気の進まない仕官の旅ではあるが、同行の人がやはり詩を好むのは何よりだ。たつて、旅愁に閉ざされがちな自分の気持ちを慰めているかのようにもある。陳衍は、この二句に傍点を施している。

さて、共に永州にたどり着いた二人は、その後どうしたのであろうか。その答えは、徐璣の五言律詩「送徐照先回江右」（徐照の先に江右に回るを送る）を見れば明らかである。詩題の「江右」は、長江中流の南岸の地で、今の江西省をさす。江西省は、徐璣の赴任地である永州（湖南省）と四霊の本拠地である永嘉（浙江省）の、ちょうど中間に位置する。この場合、江西省からさらにその延長上にある浙江省をも含むと考えると、特に問題なからう。ともあれこの詩題から、徐照が徐璣を永州に残し、一人で先に帰郷したことがわかる。詩の首聯は、次のようにうたっている。

骨体先如鶴 骨体 先に鶴の如く  
離家歳已周 家を離れ 歳 已に周し

第一句、「骨体先如鶴」とは、徐照が骨ばった体格で、まるで鶴のようにほっそりしていることを表す。前掲の徐璣の詩にも「清羸」とあり、また徐照自身が永州で書いた「永州書懷」（永

州にて懐いを書す」の首聯も、次のようにうたっている。

嗜茶疑是病 茶を嗜むこと 疑うらくは是れ病ならんかと  
羸瘦見詩形 羸瘦 詩と形に見る

「見詩形」とは、瘦せた精神の有り様が、詩にも外見にも現れている、の意。こうした例を見ると、徐照は清貧の生活を送る余り、よほど痩せ細っていたものと思われる。

徐璣の「送徐照先回江右」詩に戻って、第二句の「歳已周」は、すでに一年の周期が過ぎ去ったことを意味する。このことから、二人が「離家」すなわち故郷の永嘉を出発してから、この詩が書かれた時点で、すでに一年以上の歳月が経過していることがわかる。

また、同じ詩の頸聯は次のようにうたっている。

窮達身将老 窮達 身 将に老いんとし  
分携菊正秋 分携 菊 正に秋なり

「窮達」は、この場合「窮(困窮)と達(栄達)」ではなく、「窮」の方に力点がある。「分携」も同様で、「分(袂を分かつ)と携(手を携える)」ではなく、「分」の方に力点がある。これらの詩句から、二人が永州で別れたのは、共に老いを迎えつつある頃、ちょうど菊の花咲く秋の季節だったことがわかる。徐照を

見送った徐璣はなおも永州に留まるが、三年の任期が満了した後、やはり同地を離れ、永嘉に帰ったのであろう。

## 二、「贈徐照」(七言律詩)

次に、徐璣の七言律詩「贈徐照」を紹介しよう。この詩は『宋詩精華録』の他、『宋詩鈔』の『二薇亭詩鈔』にも収録されている。

贈徐照 徐照に贈る

●○○●●●○○○  
近参円覚境如何 近く円覚に参じ 境は如何

●●○○●●●●●○  
月冷高空影在波 月は高空に冷やかに 影は波に在り

○○●●○○●●●●  
身健却縁餐飯少 身の健やかなるは 却つて飯を餐うこと  
少なきに縁り

○○○○●●○○○  
詩清都為飲茶多 詩の清らかなるは 都て茶を飲むこと多  
きが為ならん

○○●●●○○○●●  
塵居亦似山中静 塵居 亦た山中の静かなるに似

●●○○●●●●●○  
夜夢俱無世慮魔 夜夢 俱に世慮の魔無し

●●○○●●○○

昨日曾知到門外 昨日 曾て門外に到れるを知るは

○○●●●○○○

因随鶴歩踏青莎 鶴歩かくほに随したがいて青莎せいさを踏ふみたるに困よる

〔韻字〕何、波、多、魔、莎（下平声五・歌韻）

《徐照に贈る》

近頃あなたは仏道修行にはげんでおられるようですが、現在の心境はいかがなものでしょうか。月は空高く冷たい光を放ち、その影は波の上につつています。

あなたの体が健康なのは、意外にも、食事をとることが少なかったためであり、作る詩が清らかなのは、総じてお茶を飲むことが多かったためなのでしょう。

あばら屋での暮らしもまた、山中での静かな生活に似ており、あなたが夜見る夢は、すべて世俗の邪念にわずらわされることがないことでしょうか。

昨日、あなたが家の門の外まで出て来られたことを知りました。それは、鶴のようにほっそりとした身体で歩いた足跡が、青いハマスゲの上に点々としていたからなのです。

首聯。第一句、「円覚」は、仏教における完全な悟りの境地。

「参円覚」とは、そうした境地に達するべく、仏道修行に参加

すること。具体的には、坐禅をさすと思われる。後出の第三句の内容を考慮するならば、断食の行も含まれるかも知れない。第二句は、単なる情景描写ではなく、修行によって得られる清澄な心境の比喻であろう。すなわち、夜空に輝く月は、世界を明るく照らす仏の教えの象徴であり、波に映るその影は、煩惱に悩まされながらも、仏の教えを真摯に学び取ろうとする求道者の心の象徴であると考えられる。

頷聯。対句から成る。第三句、「却」は意外な感じを表す。食事をあまりとらないことが、かえって健康を保つ秘訣である、との意。第四句、徐照は少食な一方で、茶は好物であったらしい。前掲「永州書懷」〔永州にて懐おもいを書す〕でも、「嗜たしな茶疑是病〔茶を嗜むこと 疑うらくは是れ病やまならんかと〕と、自分でも病気ではないかと思われるほど茶が好きであるとうたっていたが、徐照の没後に書かれた葉適の「徐道暉墓誌銘」にも、「嗜苦茗甚於飴蜜、手烹口啜無時」、苦い茶を甘い飴や蜜以上に好み、煮てはすすつてやまなかつた、と記されている。また『宋詩鈔』の『芳蘭軒詩鈔』には、徐照の「謝徐璣惠茶〔徐璣の茶を恵むに謝す〕」と題する五言律詩が収録されている。これは、徐璣から茶を贈られたことに対する感謝の詩である。茶が徐照の好物であることを、友人の徐璣は当然知っていたのであろう。

頸聯。やはり対句から成る。第五句、「塵居」は、俗世間にある家。この句は、徐照の家がごく普通の町中にありながらも、



まるで人里離れた山中にあるかのように閑静であることをいう。東晋・陶淵明の五言古詩「飲酒」其五の冒頭に、次のようにあるのが想起される。

結廬在人境 廬を結びて人境に在り

而無車馬喧 而して車馬の喧しき無し

第六句、徐照は厳しい仏道修行の結果、すでに世俗を超越した心境に達しており、それゆえ夜見る夢も、俗世間の邪念にわずらわされることはないであろう、との意。

尾聯。第七句は、普段は家にこもって修行をしている徐照が、珍しく家の外に出たことを特筆している。第八句、「鶴歩」は、鶴のような歩み。前掲の「送徐照先回江右〔徐照の先に江右に回るを送る〕」詩にも「骨体先如鶴〔骨体 先に鶴の如し〕」とあつたように、徐照はまるで鶴のように痩せ細っていた。ここでは、その徐照が散歩するさまを、ほっそりした鶴の優雅な歩みにたとえているのであろう。また鶴といえ、北宋の隱逸詩人として知られる林逋（九六七―一〇二八）の「梅妻鶴子〔梅を妻とし、鶴を子とする〕」の故事も想起される。徐照は林逋のように実際に鶴を飼っていたわけではあるまいが、超俗的な隱遁生活の雰囲気醸し出すために、ここで「鶴」の文字が用いられている可能性も否定できない。「莎」は、ハマスゲ。海辺に自生し、赤茶色の花を咲かせる。

この徐璣の詩に徐照が次韻して答えているので、次にそれを紹介しよう。「酬贈徐璣」と題するこの七言律詩は、『宋詩鈔』の『芳蘭軒詩鈔』に収録されている。基本的に徐璣の原詩と同じ韻字を用いているが、第一句は押韻しておらず、また第六句の「魔」を「磨」に置き換えている。

酬贈徐璣 徐璣に酬い贈る

每到齋門敲始応

齋門に到る毎に 敲きて始めて応ず

池禽双戯動清波

池禽 双つながら戯れ 清波を動かす

愛閑却道無官好

閑を愛し 却つて官の無きは好しと道い

住僻如嫌有客多

僻に住し 客の有ること多きを嫌うが如し

字学晋碑終日写

字は晋碑を学び 終日 写し

詩成唐体要人磨

詩は唐体を成し 人の磨するを要す

山民百事今全懶

山民 百事 今 全て懶し

只合煙江着短莎

ただ合に煙江にて短莎を着くべし

第一句、「齋門」は、精進潔齋をしている家の門。第二句、「池禽」は、池に浮かぶ水鳥たち。頷聯と頸聯は、徐璣の人となりと日常をうたう。第七句、「山民」は、徐照の号。ここでは自分をさしている。第八句、「煙江」は、もやのたなびく川。「莎」は「蓑」と同音で、「短蓑」はたけの短いみのを意味する。今では自分は万事が面倒になったので、漁師の格好をして川面に小舟を浮かべたいと、隱遁の願望をうたつて詩を結んでいる。

三、「句」(「黄碧」より)

最後に、五言律詩「黄碧」の頷聯を紹介しよう。もっとも『宋詩精華録』はこの二句を単に「句」と題して収録しており、詩題は明記していない。

●○○●●

水清知酒好 水 清くして 酒の好きを知るも

○○●●○○

山瘦識民貧 山 痩せて 民の貧しきを識る

川の水は清らかで、この地で作る酒がうまいことがわかるが、山の土地は痩せていて、この地で暮らす人々の生活が貧しいことがわかる。

句の意味は、特に説明を要さないであろう。地方の小官を転々とした詩人らしく、貧しい人々の生活を気遣っているのが印象深い。陳衍は、この二句全体に傍点を施しているが、やはりその点に感銘を受けたのであろうか。参考までに、次に五言律詩の全体をあげておこう。

黄碧 黄碧

黄碧平沙岸 黄碧 沙岸に平らかに

陂塘柳色春

陂塘 柳色 春なり

水清知酒好

水 清くして 酒の好きを知るも

山瘦識民貧

山 痩せて 民の貧しきを識る

鶏犬田家静

鶏犬 田家 静かに

桑麻歲事新

桑麻 歲事 新たなり

相逢行路客

相い逢う 行路の客

半是永嘉人

半ばは是れ永嘉の人なり

この詩は、『宋詩鈔』の『二薇亭詩鈔』および清・張景星他の『宋詩別裁集』巻四にも収録されている。また前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』にも収録されているので、詳しい解説はそちらに譲ることにしたい。同書によれば、詩題の「黄碧」は、地名とすれば最も落ち着きはよいが、詳細は未詳。また、この語を色彩表現とする考え方もあるとのことである。

『宋詩精華録』に収録された徐照の作品

次に、『宋詩精華録』に収録された徐照の作品を紹介しよう。冒頭で、陳衍は徐照のように簡単に紹介している。

徐照、字道暉。永嘉人。自号山民、改号靈暉。

徐照、字は道暉。永嘉の人。みづから山民と号し、改めて靈暉と号した。

この紹介に続けて『宋詩精華録』は、徐照の作品として五言絶句「莫愁曲〔莫愁の曲〕」一首、七言絶句「柳葉詞〔柳葉の詞〕」一首、それに七言古詩「分題得漁村晚照〔題を分かちて漁村晚照を得たり〕」一首の合計三首を収録している。このうち「莫愁曲」については拙稿「徐照の五言古絶句について」で、また「柳葉詞」については拙稿「永嘉の四霊の七言絶句について」でそれぞれ紹介してあるので、ここではごく簡単な紹介にとどめる。より詳しくは、それらの論考を参照していただきたい。

一、「莫愁曲」(五言絶句)

まず最初に、徐照の五言絶句「莫愁曲」を紹介しよう。この詩は『宋詩精華録』の他、『宋詩鈔』の『芳蘭軒詩鈔』にも収録されている。莫愁は、六朝時代の樂府詩に見える女性の名。石城の所在については、諸説ある。なお、この詩は五言四句から成るが、韻律的には近体ではなく古体である。

莫愁曲 莫愁の曲

●●●●●

莫愁石城住 莫愁 石城に住むも

○○○○●

今来無莫愁 今来たれば 莫愁 無し

●●●●●

只重石城水 只えに重んず 石城の水

○●●○○

曾泛莫愁舟 曾て莫愁の舟を泛かべたれば

〔韻字〕愁、舟(下平声十一・尤韻)

《莫愁のうた》

その昔、莫愁は石城に住んでいたというが、今石城に来てみれば、莫愁はどこにもいない。

それでも石城の町を流れる川の水は、ひたすら大切に思っている。なぜならそれは、かつて莫愁を乗せた舟を浮かべた水だからだ。

陳衍は、後半二句の全体に傍点を施している。

二、「柳葉詞」(七言絶句)

次に、徐照の七言絶句「柳葉詞」を紹介しよう。この詩は『宋詩精華録』の他、『宋詩鈔』の『芳蘭軒詩鈔』および清・厲鶚の『宋詩紀事』にも収録されている。前詩と違って、この詩は韻律的には完全に近体である。

柳葉詞 柳葉の詞

●●●●●

嫩葉吹風不自持 嫩葉 風に吹かれて自ら持たず

●○○●●○○○

浅黄微緑映清池

浅黄 微緑 清池に映ず

●○○●●○○●

玉人未識分離恨

玉人 未だ分離の恨みを識らざるも

●○○●●○○○

折向堂前学画眉

堂前に折りて眉を画くを学ぶ

〔韻字〕 持、池、眉（上平声四・支韻）

《ヤナギの葉のうた》

柔らかくみずみずしいヤナギの葉が風に吹かれ、自分で自分の重みを支えられないかのように揺れている。ヤナギの葉のうすい黄色とかすかな緑色が、澄んだ池の水に映っている。玉のように美しい人は、まだつらい別れの恨みを知っているわけでもないのに、屋敷の前でヤナギの枝を手折り、それをお手本にして細く長く眉を描いている。

陳衍は後半二句の全体に圈点を施し、「新巧而已（新奇で巧妙なだけである）」と評している。また『宋詩紀事』は詩題を「楊柳」とし、第三句の「恨」を「苦」とする。

三、「分題得漁村晚照」（七言古詩）

最後に、徐照の七言古詩「分題得漁村晚照」を紹介しよう。

この詩は『宋詩精華録』の他、『宋詩鈔』の『芳蘭軒詩鈔』にも収録されている。

分題得漁村晚照

題を分かちて漁村晚照を得たり

○○●●●○○○

漁師得魚繞溪売

漁師 魚を得て 溪を繞りて売る

●○○●●○○○

小船横繫柴門外

小船 横さまに繫ぐ 柴門の外

●○○●●○○○

出門老嫗喚鶏犬

門を出ずる老嫗 鶏犬を喚び

○○●○○●○○○

收斂蓑衣屋頭曬

蓑衣を收斂して 屋頭に曬す

●○○●●○○○

売魚得酒又得錢

魚を売りて酒を得 又た錢を得たり

○○●●●○○○

归来醉倒地上眠

帰り来たれば 酔いて地上に倒れて眠る

●○○●●○○○

小兒啾啾問煮米

小兒 啾啾として米は煮えたるかと問ひ

○○●○○●○○○

白鷗飛去蘆花煙

白鷗 飛び去りて 蘆花 煙る

〔韻字〕 売（去声十・卦韻）、外（去声九・泰韻）、曬（去声十・卦韻） 通押／錢、眠、煙（下平声一・先韻）

《作る詩の題を分けあつて「漁村の夕映え」という題を得た》  
漁師は魚を手に入れ、谷川をめぐつて売り歩き、小舟を粗末な門の外側に横さまにつなぎとめる。

門から出て来た老婆が犬とニワトリを呼びよせ、漁師の蓑を片付け、屋根の上に日干しにする。

漁師は魚を売つて酒を手に入れ、また小銭を手に入れた。家に帰つて来ると、酔つ払つて地面の上に倒れて眠る。

子供はしくしく泣きながら、御飯はまだ炊けないのかとたずね、白いカモメは彼方へと飛び去り、その後には、アシの花が夕闇の中にぼうつとかすんだように咲き乱れている。

まず、詩題について。「分題」は、作る詩の題を仲間たちと分け合うこと。会合の行われた時期や、会合に参加した人数はわからないが、その場にいた詩人たち数人で作る詩の題を分担し、徐照がいくつかの選択肢の中から「漁村晩照」という題を選び取つたのであろう。「晩照」は、夕陽が照らすこと。なお、この詩は七言八句から成り立っているが、前半と後半で韻の種類が異なっているので、律詩ではない。前半は仄字で、後半は平字で、それぞれ押韻されている。

第一句、「繞」は、めぐる。「溪」は、谷川。「繞溪売」は、谷川を小舟でめぐつて魚を売ること。第二句、「横繫」は、横さまにつなぎとめる。「柴門」は、粗末な家の門。

第三句、「老嫗」は、老婆。おそらくは漁師の母親か妻であ

ろう。「収斂蓑衣」は、漁師が脱ぎ捨てた蓑を老婆が片付ける、の意。「屋頭曬」は、屋根の上にさらして日干しにする。漁師の着ていた蓑は、当然濡れているからである。

第五、六句は、特に説明を要さない。仕事を終えた漁師は、酒と小銭を手に入れて上機嫌になり、酔つ払つてそのまま地面に倒れ、眠りこけてしまった。陳衍は、この第六句以下の三句全体に傍点を施している。

第七句、漁師は満足そうだが、可哀相なのは、お腹をすかせた子供（たち）である。「啾啾」は、子供が小声ですすり泣く声の形容。「問煮米」は、まだご飯は炊けないのか、と子供が尋ねる意。第八句、そんなことはお構いなしに、白いカモメが一羽、彼方へと飛び去つて行く。あたりは夕闇に包まれ、後にはただ白いアシの花が一面に咲いているばかり。

この詩は実景を見てうたわれたわけではなく、おそらくは四霊の会合における遊戯的な創作であり、即興的に書かれた作品と思われる。しかし、夕暮れを迎えた漁村の情景が、まるで動画を見るかのように鮮明にうたわれており、詩人の想像力のたくましさに驚かされる。なお、同じ会合で他の詩人たちがどのような詩を作つたのかは、残念ながら知ることができない。



## おわりに

以上、『宋詩精華録』に収録されている徐璣と徐照の作品を概観した。これらの詩は、数量からすれば二人の創作のごく一部に過ぎないが、その作風の特徴を端的に物語る作品ばかりである。永嘉の四霊は、いずれも清貧に甘んじ、苦吟に徹した詩人たちである。その作品は概して端正で精緻な細密面を思わせるものであり、必ずしも伸びやかな広がりを持たないが、そのかわり独特の清楚で高雅な風格を保っている。その魅力を、少しでも感じていただければ幸いである。なお、『宋詩精華録』に収録された翁卷と趙師秀の作品については、いずれ稿をあらためて論じることしたい。<sup>10)</sup>

## 注

- (1) 徐璣の父の徐定(一一一八―一一九二)は永嘉の鮑氏と結婚し、永嘉に居を移した。
- (2) 四霊の序列は、厲鶚『宋詩紀事』では徐照、徐璣、翁卷、趙師秀の順となっているが、錢鍾書『宋詩選注』では徐璣、徐照、翁卷、趙師秀の順となっており、陳衍『宋詩精華録』では趙師秀、翁卷、徐璣、徐照の順となっている。ここではひとまず最も古い『宋詩紀事』の序列に従うが、作品は『宋詩精華録』の順序で紹介する。
- (3) 『史記』「伯夷列伝」／伯夷・叔齊、孤竹君之二子也。……武王已平殷乱、天下宗周、而伯夷・叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇

而食之。……遂餓死於首陽山。

- (4) 『千家詩』は、翁卷の七言絶句「鄉村四月」と趙師秀の七言絶句「約客」を収録している。
- (5) 錢鍾書『宋詩選注3』(二〇〇四年十二月、平凡社東洋文庫)三二一頁、宇野直人『漢詩の歴史 古代歌謡から清末革命詩まで』(二〇〇五年十二月、東方書店)三二六頁、吉川幸次郎『宋詩概説』(二〇〇六年二月、岩波書店)二六五頁などを参照のこと。
- (6) 徐照が徐璣に贈った五言律詩「贈徐璣(徐璣に贈る)」の頸聯も「去夢千峰遠、為官三歲期(夢より去れば千峰 遠く、官と為るは三歳の期なり)」とうたっており、徐璣の永州での任期が三年であったことを裏づける。
- (7) 徐璣にはこの他にも「湘水」および「湘中」と題する五言律詩があり、いずれも永州時代の作品と考えられる。
- (8) 前野直彬『宋詩鑑賞辞典』一四七頁を参照のこと。
- (9) 拙稿「徐照の五言古絶句について」は二〇〇七年九月発行『愛知大学文学論叢』第一三六輯に、「永嘉の四霊の七言絶句について」は二〇〇七年三月発行『橄欖』第十四号に、それぞれ掲載されている。
- (10) 『宋詩精華録』に収録された趙師秀の作品は、五言律詩二首、七言絶句二首。翁卷の作品は、五言律詩三首、七言絶句二首、五律の対句三聯である。このうち趙師秀の五言律詩「雁蕩宝冠寺」と「薛氏瓜廬」については、すでに拙稿「趙師秀の五言律詩「雁蕩宝冠寺」と「薛氏瓜廬」について」(二〇〇七年七月発行『言語と文化』第十七号)で紹介しており、また趙師秀の七言絶句「数日」「約客」および翁卷の七言絶句「鄉村四月」は、錢鍾書『宋詩選注3』に収録されたものと重複している。